

2014年7月13日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記7章18～29節

説教：祝福してください

1 ダビデ

1) 日本人の祈り：「子孫が末永く繁栄するように」

日本では、お盆やお彼岸の季節になれば、実家に集まり先祖のお墓参りをする習慣が根強く残っています。そのお墓参り、あるいは仏壇の前でもよい。人々は手を合わせながら何を願うのか。おそらくこんなことでしょう。「私たちがこうして元気で生活できるのはご先祖様のおかげです。これからも〇〇家が末永く繁栄できるようご先祖様、お守りください。」日本では、「八」という漢字が好まれるくらい「末永く」、つまり「とこしえに」ということを願う傾向があります。けれども、そうしたところでとこしえに続くのかどうか、根拠がある訳ではありません。ひたすら神さま、仏様、ご先祖様にお願いをするしかない。それが多くの方が感じている現実です。

2) ダビデの祈り：「とこしえに続くようにしてください」

ダビデは29節でこう祈っています。「今、どうぞあなたのしもべの家を祝福して、とこしえに御前に続くようにしてください。」なんだか日本人と同じようなことを祈っているように見えます。

ダビデも何も根拠もなく、とにかく永遠に続けばよいという願望を語ったのでしょうか。そんなことはありません。ここにあるのはダビデが祈った言葉ではありますが、神がダビデの口を通して語らせていると見ることもできます。神のことばですから必ず根拠

があるはずですよ。いったい何を根拠にして、ダビデは「とこしえに」と祈ったのか。そのことを考えていきます。

2 神

1) 民を贖う

今日の箇所でも、同じ言葉が何度も繰り返されていることに気がついた方がいるかもしれません。「神、主よ」という言葉です。数えてみると七回繰り返されています。聖書で七は完全であることを意味します。偶然ではなく、意識して七回繰り返しています。こんなとき、一番大切なことは真ん中に置かれていると考えるほぼ間違いはありません。四番目が真ん中になります。具体的には22節から24節にあたりますが、そのうちの23節を読みます。「また、地上のどの国民があなたの民のよう、イスラエルのようでしょう。神ご自身が来られて、この民を贖い、これをご自分の民とし、これにご自身の名を置かれました。あなたは、ご自身の国のために、あなたの民の前で、大いなる恐るべきことを行い、この民をあなたのためにエジプトから、そして国々とその神々から贖ってくださいました。」

神がイスラエルの民たちをエジプトから救い出されたことを、贖ってくださいましたと言っております。「贖う」ということばは最近ではあまり使わなくなりました。聖書の別の箇所では、「救い出す」とも訳されています。救い出すと聞くと、例えば、井戸に落ちた者をロープで引き上げる、そんなことを想

像します。想像するのは簡単ですが、実際にこれをやるとなると大変です。ただロープを井戸の中に吊りおろしただけでは、人を救うことができない。ロープを引き上げなければいけません。一人の人を引き上げるのですから、相当の力がいります。手の皮が破れ血が流れる覚悟が必要です。生半可な気持ちでできる事ではない。人を救い出すためには、誰かが血を流して犠牲にならなければならない。それが「贖う」ということの本来の意味です。

2) 犠牲となる

イスラエルは、かつてエジプトから贖い出されたという経験をしています。贖い出されたと言われる以上、誰かが血を流し犠牲になったことを意味します。いったい誰が犠牲になったのでしょうか。

出エジプト記 13 章 15 節を読みます。「パロが私たちを、なかなか行かせなかったとき、主はエジプトの地の初子を、人の初子をはじめ家畜の初子に至るまで、みな殺された。それで、私は初めに生まれる雄をみな、いけにえとして、主にささげ、私の子どもたちの初子をみな、私は贖うのだ。』」

イスラエルがエジプトから贖い出されたとき、犠牲となったのは、エジプト人の初子、エジプトの家畜の初子でした。こんなふうになると、ある方は、「聖書の神は残酷だ」と言うかもしれません。日本でも昔、神の怒りを鎮めるために生きている人間を殺してささげたことがあるそうです。聖書の神もこれと同じで、神の怒りを鎮めるために初子が殺された。なんと野蛮な神なのか。そういう疑問です。

本当にそうでしょうか。神は残酷な方だと

言うのは簡単です。では、私たちは残酷ではない、と言えるのか。心の中で何を思っていますか。自分に対していやなことをする人を赦したでしょうか。主の祈りで「私たちも私たちに負い目のある人たちを赦しました」と祈りましたが、本当でしたか。「赦しました」と口で言って赦せるなら誰も苦勞しません。心の中には相手を赦せない自分がいる。それが私たちの本当の姿ではないですか。「あんなやついなくなればよい。」そう思う者は人を殺しているのだ、と聖書は言います。心の中で人を殺しておきながら、一方では「神は残酷である」と言う。いったいどっちが残酷なのでしょう。

イスラエルの民が贖い出されたとき、エジプトの初子が死ぬことになったのはなぜか。神が残酷なのではありません。人が犯した罪というものがそれほど重いということです。神を責める前に、私たちが犯した罪がどれほどひどいものであるのか、まずそのことを考えるべきでしょう。

3) 家を建てる

前回は 1 節から 17 節までを見ました。そこには、主が預言者ナタンを通して、ダビデの家にこれからどのようなことをしてくださるのか、その内容が詳しく書かれていました。このことを聞いたダビデは特に心 12、13 節の言葉に心を留めました。「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

神の契約の箱は粗末な天幕の中に置かれ

ていました。けれどもダビデは杉材の家に住んでいます。人間だけが立派な家に住んでいるのですから、なんだか落ち着きません。やはり神のために家を造るべきではないかと考え、ナタンに相談します。これに対する主の答えは意外なものでした。神ご自身が、ダビデの家、イスラエルの民のために、一つの家を建てる。そう言われました。

ダビデはこれを聞き、初めは自分の子どもたちの将来のことだろうと受けとめたかもしれません。確かに、ダビデの子であるソロモンは、イスラエルに最も繁栄した時代をもたらし、神殿を建設していくのです。

ところが、そんな繁栄の時代は長くは続きません。ダビデのときから数えておよそ四百年後にエルサレムは陥落してしまいます。主は、ソロモンのことを言ったのだと見るなら、「とこしえまでも堅く立てる」ということばは成就しなかったこととなります。これはおかしい。そうすると、これはソロモンを指しているのではない。たかだか百年や二百年先の話ではない、もっと先の未来のことを主は語っておられたのです。「わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

やがて遣わされる救い主のことを指しています。救い主が永遠の救いを与えてくださることを約束しています。ダビデは確信します。

4) 疑問：①どのようにして

それはよいとして、ひっかかるのは「とこしえまでも」ということばです。二つ疑問があります。一つ目はどのようにしたらそれが可能になるのか。そういう疑問です。エジプト脱出の時はエジプト人の初子が死にました。でもそれは「とこしえの救い」にはなら

なかった。限界がありました。ということは、永遠に救われるためにはもっと別の方法が必要になります。結論から言えば、人間が死んでも限界がある。神のひとり子である方、初子となられた方が一度だけ死ぬことによって、永遠の救いが完成することになります。

5) 疑問：②どうやって確かであると知ることか

二つ目の疑問。この救いが永遠に続く、「とこしえ」という長さであることをどうやって確かめるのか。だれも検証できないのではないか。これも結論から言えば、主は十字架で死んでくださったけれども、三日目によみがえられたことによって、証明していただきました。死に打ち勝ったということは、もう誰もこの方を滅ぼすことができない。つまり永遠に続くということがわかるわけです。

3 祝福してください

ダビデは主の救いのご計画を聞き、驚きました。神がこんなちっぽけな者、いつも罪を繰り返す神を大切にしているとは思われない、そんな者にこれほどの恵みをくださる。神とはいったいどんな方だろう。とまどいながらも、神の約束を信じていきます。そしてこう祈ります。29節。「今、どうぞあなたのしもべの家を祝福して、とこしえに御前に続くようにしてください。」ダビデの家の子孫繁栄を祈っているかのように見えます。でも、「あなたのしもべの家」とは誰の家ですか。今見てきたとおり、ダビデの子孫から出る者の家です。ダビデの時代からおおよそ千年の後に来られた救い主が建ててくださった家。主のみからだを指しています。自分の家のこと

ではない。言い換えれば、ダビデはこう祈っていたのです。「どうぞあなたのひとり子である方が向かわれる十字架の贖いの死と、よみがえりのみわざが必ず成し遂げられますように。」

「祝福してください」というと、何かすばらしいプレゼントが神さまからいただける、そんなことを想像します。でも主がくださる祝福とは、なんですか。ひとり子である方がいのちを捨てて、贖いだしてくださる。そのようにしていただいた永遠のいのち。これが祝福です。これ以上の祝福があるでしょうか。このうえ、なおどんな祝福が必要なのでしょうか。最もすばらしい祝福を私たちはいただいている。そのことを思い起こしていきます。